

嘗言。予少失怙。惟聞爲加陽人已。未知其桑梓何如。瘡痍懷之。弗得有年于茲。其徒中村歌之介者。有故屢往來於加越之間。而會知大關氏無嗣族。弟久田安左衛門者晚年好鑿。襲兄之氏與稱。自改後安。且其墳墓見在於斯。而歲時奠祭久廢之狀也。走而到于大阪告之歌右衛門。相共悲喜交集。歌右衛門揮淚曰。予也雖賤優乎。苟繼大業。幸蒙里巷之稱譽。即於生計亦弗爲乏。然其所屬。乃先人之族而已。每一念至。未嘗爲之不嘆息。豈圖吾子代予索搜。得之舊族中。誠生平志願足矣。自今而後不爲徒弟。請待以昆弟之分乎。歌之介起拜曰。曷敢當焉。願欲建墓碣於尊翁之鄉里。身自改業爲商賈。而興起大關氏家系繼絕。永奉歲時奠祭。爲之奈何。歌右衛門歡抃曰。事出非望。於予何幸加焉。行矣。欽乎哉。於是乎歌之介還金澤。便令一地日棟爲文。且計寺主了妙隨公。與石工茂信築墓碣。紀其事於碑陰云。實文政六年三月也。乃銘之。銘曰。

戲乎優兮。使人喜悲。爲惡終罹禍。作善果有祥。美哉世之善巧方便。尙勝以仁。生庸暨。

右藏石に、

辛酉季夏奉元祖歌翁之遠忌營。

四代目歌右衛門門人幼名觀八事。

雀十郎九拜

按するに、右辛酉は文久元年也。元祖歌右衛門寛政三年十月歿せしより七十一年なれども、文久元年に五十年忌の追福として法會を修行し、此なる墓碣を修繕せしなるべし。或は曰く、此の碑文は金澤藩士津田支蕃の醫員小阪壽安の撰ぶ處にして、金澤町役人頼得宗俗名油紙屋三郎右衛門の筆跡なりと。彼碑文に令一地日棟爲文とあるもの、小阪壽安の法名ならんか。

○久榮山常福寺址

法華宗也。貞享二年の由來書に云ふ。當寺之開基は、正保四年に瀧谷妙成寺日條上人建立仕、至今年三拾九年に罷成。當寺之居屋鋪は地子地に罷有。と載せたるのみにて、輒近に創立せし寺也。其の寺地は卯辰の村地に而、相對請地なりしが、明治元年三月五日寺中より出火し、寺院悉く燒亡す。依りて右寺地を他へ譲り、卯辰長久寺の客殿を買請け寺院となし、移轉之儀及出願許可を得て翌二年三月

移轉す。舊寺地は後に村地となし、今は畠地と成りたり。

妙法山蓮華寺

○妙法山蓮華寺址

法華宗也。貞享二年の由來書に云ふ。當寺開基、正保二年瀧谷妙成寺十七世日傳上人建立。至當歲三拾九年。居屋敷地子地居住仕。とありて、是も輒近之寺院也。寺地は卯辰の村地に相對請地也。明治八年移轉の事に治定、卯辰妙泰寺客殿を買受け寺院となしたり。舊地は今畠地と成る。又此の蓮華寺卯辰へ造立以前の古寺地は、淺野川鹽屋町の近邊なる勘解由町なり。則ち上申書の寫あり。如左。

御尋に付申上候。

一、蓮華寺古屋敷之儀、淺野川下鹽屋町之近所勘解由殿町に而御座候處に、三代以前之住持之節、貧寺故不相續、加及大破申候。剩寺屋鋪御用地に罷成候。然處に私先住本寺より寺號申請、御奉行所へ御斷申上、卯辰百姓地之内替地申請、寛文拾一年に寺造立仕申候。

右之通先住持讓書之内に見ゆ申候。但し御用地に成申候委細、井中絶之年號之儀は委知不申候。以上。

三月廿日

瀧谷妙成寺末寺卯辰

右年號は記載無之、貞享二年の由來書之控帳に載之。貞享二年の頃なるか。此の上申書にて見れば、中絶再興せし寺也。

○弘法山三寶寺

法華宗也。貞享二年の由來書に云ふ。當寺開基、寛永二十一年能州瀧谷妙成寺十七世日傳聖人建立。壽福院殿爲御牌所、於小松、九里覺右衛門母儀清光院、小幡下野、岡田隼人、栗田四郎右衛門檀頭にて被取立、御位牌被建置。然處微妙公逝去に付、諸士檀那中金澤へ被引取。依之萬治二年一集に金澤へ出、卯辰山地子地に建立仕。とあり。別來歷書には、壽福院殿爲御位牌所、寛永二十年於小松御一門中より建立被致、開山は本寺妙成寺十七代日傳聖人也。於小松寺屋敷は、十村紙屋新右衛門裁許地之内炭藏にて、三百步請地仕罷在候。然處微妙公逝去以後、檀那中金澤へ被引取に付、萬治二年一集に金澤へ出、寺屋敷之儀訴訟申上候得共不相叶故、泉野寺町に休意と申座頭之居屋敷之内借地致し罷在、其後觀音下町へ引越、丹羽次郎兵衛家來鳴野